

注意 ○ 特に決められたもの以外は、記号で答えなさい。

○ 句読点も一字と数えます。

〔二〕 次の問いに答えなさい。

(1) 線部のひらがなを漢字に直しなさい。

① 私と弟の性格はたいしよう的だ。

② りっぱな振るまい。

(2) 線部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

① 鳥が連な^れって飛ぶ。

② 家族の安否^{やすひ}が心配だ。

(3) 次の()にあてはまる漢字一字を書き、文を完成させなさい。

① 一心不()に走る。

② 友だちと意気()合する。

〔二〕 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

高校生の光瀬一輝は目の病気によつて視力をほとんど失つてしまい、生きがいであったサッカーができなくなった。氣力をなくしていた一輝だが、サッカー部顧問の大滝先生に案内された先で、かつて大滝先生の生徒だった、現役*ブラインドサッカー選手の佐藤ナツオに出会う。

「ブラインドサッカーって……サッカーなんですか」

一輝はぼそつと聞いた。ひどく不機嫌なかんじになってしまった。

「サッカーかつて……」

ナツオさんは考え込むみたいな声で言ってから、がはは、と豪快に笑った。

「そりゃあサッカーやろ。光瀬くん、おもしろいこと聞くなあ。

まあ、それって、フットサルがサッカーかっていうのと似た質問ちゃう？ ブラサカのフィールドはフットサルと同じ大きさやし、5人制やし、そもそも、手をついたらファウルやし」

手を使つたらファウルって……。たしかにサッカーはそういうルールだが、そこが同じならサッカーなんだろうか。やはり疑問は疑問のままで。

「サイドBってなんですか。変わったチーム名ですよ」

「昔のアナログレコード、知つとる？」

「はい、友だちが持つてます」

*野田の自宅には、20世紀の音源がたくさんある。おやじさんの趣味だそう。アナログレコードにはA面とB面があつて、前半を聞いたらひっくり返さなきゃならない面倒なメディアだ。

「*サンダーボルツがブラサカのチームを作る時、もう一つのサッカーやと強調したくて付けたんちゃうかな。あとブラサカのBをかけてる」

「ああ……そういうことですか」

「スポーツは、ルールの中で楽しむもんやろ。バスケットは3歩までしか歩けへんし、サッカーは手を使えへん。ブラサカは、手だけやなくて、視覚も使わんルール。単に障がい者スポーツってわけやない。実際、サイドBには、見えるのに目隠しして参加しとる選手もおるよ。ぼくにとつては、自分の判断で全力で走れるのがうれしい競技やな」

結局、一輝はブラサカに誘われているみたいだ。

大滝先生の目論見は、そこだと思う。

でも、前ほど嫌ではなかった。

たぶん、それは、ナツオさんが、暑苦しいくらい明るいからだ。

失明と聞いて想像する「暗闇」とは反対に「光」を感じさせる人だから。少なくとも、こしばらく引きこもっていた一輝より、ずっと明るい場所にいる。

「ルールが違つてことは、サッカーとは別競技ってことですよ。ね。おれが好きなのはサッカーなんぞ」

一輝はそう言いながら、①ますます自分が暗いところに落ち込んでいくように感じた。

「うん、まあそれは分かるわ。で、ちょっとやってみよか」

え？と思ううちに、ナツオさんは立ち上がり、シャカシャカいうボールを一輝の膝の上に落とした。

「光瀬くん、目を閉じて蹴ってみ。ぼくはそれを拾って、返すから」

「え……はい」

一輝は言われるままに立ち上がり、ボールを地面に落とした。

足裏で確認すると、シャツと音がした。さらに揺らしてみると、今度は、シヤカシヤカと小気味よいリズムで鳴った。

すーっと意識が集中した。

足元にボールがあつて、それがほどよいサイズなら……蹴る。サッカー選手の本能だ。

蹴った瞬間に、ジャツと芯のある音が聞こえてきた。快感ですらあつた。

ナツオさんが走る足音。

かなり見当違いの方向に転がつてしまったのだろう。

でも、ナツオさんはボールを止めたらしい。

すぐにズジャツと重たい音が返ってきた。

強いボールが来る！

音を頼りに足を出した。あわてて、バランスを崩した。伸ばした方の足ではなく、軸足にボールが当たった。やつぱり耳で聞いただけでは、場所はやんと分らない。

跳ね返ったボールをまたナツオさんが拾つて、今度は優しいシャツという音で一輝に返した。

ボールがすーっと足に吸いつくみたいに止まった。

「おお、止めた？光瀬くん、止めた？」

「はい。なんとか」

止めたというよりは、パスがぴつたりで、たまたま止まったというのが正しい。

それにしても、ナツオさんはとてもうれしそうだ。なんで、そんなによろこぶのか分からなかった。

「いやあ、よう止めたな。ブラサカの最初の関門は、ボールを蹴ることやのうて止めること。光瀬くんセンスあるわ」

「そうっすか……」

「じゃ、次のレッスン。まず、もう一回、ボール、こっちに返して。そしたら、ぼくがドリブルするから取りに来てみ」

「え、まじっすか」

一輝がボールを蹴り返すと、ナツオさんはそのまま、ボールをリズムカルに鳴らしながらドリブルをし始めた。

突然の展開に戸惑いつつも、一輝はその様子を想像した。

この前フットサル場で見た練習風景では、両足で交互にタッチする独特のドリブルをしていたっけ。このリズム、きつとあれだ。

じゃあ、どんなふうにしたらボールを奪える？

正直、分からないけれど、目を閉じたまま、音の方向にそろりと一歩近づいてみた。

体がすくんだ。なんだこれ。ほんと、わけ分かんない！

それでも、ドリブルをしている選手がいたらボールを奪いくのがサッカー選手だ。これも本能に近い。

おそろおそろ足をしたら、案の定、空振りした。

それどころかボールの音が消えて、一輝はパニックになった。ただでさえ見えていないのに、音がないと何も分からない。

こんなのサッカーじゃない。ただの目隠し鬼だ。

結局、一輝はバランスを崩して、尻もちをついた。

「今のはボールを足の上に乗せて音を消すフェイント。な、おもしろいやろ！いろいろ違うところがあるけど、それでもサッカー

やとぼくは言いたいね」

一輝はむっとして、黙り込んだ。だって、こっちは初心者だ。

いいように打ち負かして得意げになっているナツオさんは大人げない。正直、腹が立った。

でも、そんなこと関係なしに、話し続ける。

「だから、光瀬くん、一度くらいは、練習に来てみ。春名が心配しとるし、サイドBには、きみを待っとるやつもおる。ボールあげるから、自分で遊んでみるとええ」

ナツオさんは、「じゃあ、ぼくは、そろそろ行かな」と言い、一輝の方にボールを転がした。

シャツと小さな音がして、ボールは足元で止まった。

一輝は自分の鼓動が高鳴っているのに気づいた。

「② だだの鬼(ご)っこだろ」と、口の中でつぶやいてみたけれど、どくんどくと心臓はもつと強く脈打った。

「大滝先生、悪いですけど、そっちに、ぼくの、白杖(はくじょう)ありますか？」とナツオさんの声。

「ああ、これか。佐藤、おまえ、相変わらず物を適当な場所に置いておくんだな。ベンチの下に転がつていたぞ」

「がはは、先生にはかありません。いや、どうせ先生来るんやし、探してもらえん思ったら、気が緩みまして。ありがとうございます。また、連絡しますんで、今度は飲みにいきましょう」

「こっちからも連絡するよ。きょうはありがとう」

「じゃな、光瀬くん。また、やろな！」

さつそうとした足音が遠ざかるのを一輝は尻もちをついたまま聞いた。

胸に手を当ててふうっと深呼吸してから、足に触れているボールをシヤカ、シヤカと動かしてみた。

気になることがある。

足にボールを乗せて音を消すフェイントって、いったいどうやるんだろう。

足の甲に引っかけるとかんじ？あるいは足首との間で挟むかんじ？いつのまにかナツオさんの技術のことを考えている。目隠し鬼じゃなくて、ドリブルの技術として。

大滝先生がしみじみ語る声が聞こえてきた。

「本当に、あの佐藤が学校の先生だっていうんだからなあ。わたくしが知っている頃は、結構荒れていてね。あり余るエネルギーの行きどころをなくしていたんだから、無理もないんだが。それが今では、高校生にえらそうなことを話す。本当におもしろいものだ……」

一輝は、大滝先生の言葉を頭の片隅で意識しながら、やつぱり足元のボールを触り続けた。

シヤカシヤカとボールを鳴らすこの競技は、サッカーなのかサッカーじゃないのか。

考えると、ますます分からなくなって、とりあえず、一輝は立ち上がった。

頭の中でイメージしたナツオさんのフェイント技を、自分でもやってみた。

うまくいかない。どうしても音がしてしまふ。

最初、イラッとしたけれど、ボールに触れるよるこびが、深いところからこみ上げてきた。

あの技を覚えたい！試行錯誤してでも、ものにしてやる。

大滝先生が、黙ってこっちを見ているのが分かる。思う壺(つぼ)ってやつだ。それでも、一輝はああでもないこうでもないでボールをこねくり回した。

(川端 裕人『太陽ときみの声』による)

* ブラインドサッカー(ブラサカ)：5人制のサッカー。ゴールキーパー以外は全く目が見えない選手がプレーする。転がると音が出るボールを使用する。

* 野田：一輝の同級生。

* サンダーボルト：一輝の町にある、プロサッカーチーム。

* 目論見：計画。

* 春名：ナツオの妹で、一輝の同級生。

* 白杖：視覚障がい者が歩行の際に使う白い杖。

(1) 線部「体がすくんだ」とありますが、体がすくむの意味で本文に合うものを次から一つ選びなさい。

- ア. 不安を感じ、体が動かなくなること
- イ. 驚きのあまり体を丸めること
- ウ. 恐怖にかられ、気持ちが落ち込むこと
- エ. どうしていいのかわからず、体がふるえること

(2) 線部①「ますます自分が暗いところに落ち込んでいくように感じた」とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを次から一つ選びなさい。

- ア. 本当は嫌なのに、ナツオと大滝先生にブラサカに参加させられそうだと思ったから。
- イ. 前向きなナツオと関わっていると、自分がどんどんみじめに感じたから。
- ウ. 視力を失っても明るいナツオの言葉を素直に聞けず、意地を張ってしまう自分が嫌だったから。
- エ. ブラサカの説明を聞き、やはり自分の好きなサッカーではないと思ったから。

(3) サッカー選手が本能のように行うこととして、本文中にあげられているものを二つ探し、それが含まれる一文の、はじめの五字をそれぞれぬき出しなさい。

(4) 線部②「ただの鬼ごっこだろ」とあるが、このときの一輝の気持ちとして最も適切なものを次から一つ選びなさい。

- ア. ナツオが転がしたボールを止めることができて、うれしいがてれくさい。
- イ. 思い通りにならないボールのコントロールに嫌気がさしている。
- ウ. 自分の話を聞かず、勝手にボールを押し付けたナツオに対して腹を立てている。
- エ. 冷めていた気持ちが、ナツオとのやり取りによって動いている。

(5) ナツオとブラサカのボールを蹴り合う前と後とで、一輝のブラサカに対する思いはどのように変化しましたか。七十字以内で答えなさい。

※ブラインドサッカーはブラサカと表記すること。

(6) この文章についてあてはまらないものを次から一つ選びなさい。

- ア. 擬音表現を使うことで視覚に頼らないブラインドサッカーの特徴を表現している。
- イ. ブラインドサッカーに対する一輝の心情が、目に映る風景を通して表現されている。
- ウ. 視力を失ったことで暗くなった一輝と、失っても前向きなナツオが対比して書かれている。
- エ. 大滝先生の発言によってナツオの人物像が明確化されている。

〔三〕次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

①ぼくたち獣医は、毎日いろんなペットの命をあずかっています。すると少しずつ新鮮さがなくなり、まっすぐに目の前の動物を見る、ということがしづらくなってきました。②

②ぼくはいつも後輩たちに、命に向きあうときは、「ピアノ線のようにまっすぐに」という言葉をつたえています。みなさんはピアノ線に直接さわったことがあるでしょうか。さわってみると、ほんのちよつとふれただけで、いい音がひびきます。「強くて、まっすぐで、感度がいい」。それが、いい獣医になるために必要なことだと思っています。自分や他人の感情にふりまわされない強さ、思いこみにとらわれず、目の前の動物を見つめるまっすぐさ、小さなことにも気づく感度のよさが、とても大切なのです。

③まっすぐに見る、というのは、案外むずかしいものです。自分が知っていること、経験してきたことで、わかったつもりになっていると、肝心なことを見おとしてしまいます。ぼくにとって何千匹目、何万匹目の動物でも、飼い主さんにとっては、たった一匹の大切なペット。子どものとき、夢中になって観察したように、どんなに経験をつんでも、かわらずまっさらな気持ちで動物を見ること。それがぼくの、命への向きあい方です。

④ぼくは、ペットを飼う人が、そのペットのためにむりをしてはいけないと思っています。自然界からつれてこられたものとは、ともかく、人間のペットとして売られているものの多くは、人間をいやすために、あるいは人間の興味を満たすために繁殖させた、「つくられた命」です。そのペットのために、人間の生活がなりたたなくなってしまうのは、ペットはペットの役割をはたせていないことになってしまうと思いませんか？

⑤治せない病気もある。整えきれない環境もある。不注意で死なせてしまうこともあるし、最上級のえさをあたえつづけられるわけでもありません。それでも、できる範囲でペットのことを思いやってやればいい。自分のご飯をがまんしてペットにえさをやる必要もないし、自分のねむる時間をけずって、毎日そうじをする必要もない。手術代がはらえないときに借金をして手術する必要もないと、ぼくは思っています。どこかであきらめなければ、人間のほうがたおれてしまいます。

⑥でも、その気持ちと同じくらい強い気持ちで、あきらめてほしくないこともあります。それは、「最後までめんどうをみる」ということです。これは、生きものを飼う上での、大原則です。

⑦生きものは、決して人間の思いどおりにはなりません。どんなにかわいがっても、なれてくれないということだってあります。とくに、人間にペットとして飼われてきた歴史が長くない動物たちはおくびようなことが多く、さわるのをいやがる

動物がたくさんいます。人間に見られることすら落ちつかなくて、すがたを見せてくれない動物も多いです。

⑧犬やねこは比較的飼いやすい動物ですが、中にはとてもこわがりで、びつくりすると飼い主さんでもかんでしまうくせがあるものもあります。決して飼い主さんの愛情が足りないわけではありません。そのペットの性格なので、なかなかおることはありません。そんなとき、飼う前に夢見ていたような生活ができません。見はなさないでほしいのです。

⑨飼い犬が大きな声でほえてご近所さんに迷惑をかけても、飼いねこが家のかべでつめをといで、ボロボロにしています。ペットを飼いはじめた以上、そのペットの命は、飼い主が見まもっていくしかありません。飼い主が世話をするをなげだした瞬間に、その命は路頭にまよってしまいますからです。

⑩ペットは元気いっぱい、調子がいいときばかりではありません。病気になれば病院につれていかなくてはなりませんし、どんなにかわいそうで見るのがつらくなっても、元氣のない様子を見なくてはならないこともあります。

⑪そして多くの動物は、人間よりもずっと早く、歳をとってきます。病気になったり歳をとったりして足が立たなくなったりときには、うんちをするのを助けてあげたり、うんちでよごれてしまった体をふいてやったりするのも、飼い主さんがやってあげることです。それをしてやれるという気持ちがあつてはじめて、命を飼うことができます、ぼくは考えています。

(田向 健一『珍獣ドクターのドタバタ診察日記』による)

(1) 線部「元氣のない様子」の「の」と同じ使われ方をしているものを次から一つ選びなさい。

- ア. 時計の針がゆつくりと進む。
イ. 私は新聞を読むのが好きだ。
ウ. 葉っぱの茂った木が目印だ。
エ. ぼくには看護師の姉がいる。

(2) 線部①「まっすぐに目の前の動物を見る」とありますが、それは具体的にどのようなことだと筆者は述べていますか。「まっすぐに」の指す内容を明らかにして三十字以内で説明しなさい。

- (3) ―線部②「つくられた命」とはどういう意味ですか。適切なものを次から一つ選びなさい。

ア. 人間によって自然界からつれてこられた命
イ. 動物は売るものではないのに売られている命
ウ. 人間の生活を破たんさせてしまう命
エ. 人間が人間のためだけに増やした命

- (4) ①～⑪の段落を内容のまとまりを考えて、分けるとどうなりますか。最も適切なものを次から一つ選びなさい。

ア.	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
イ.	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
ウ.	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
エ.	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪

- (5) この文章で筆者が述べていることとして正しいものを次からすべて選び、答えなさい。

ア. 飼い主の愛情さえあれば、ペットとの生活は思いどおりになる。
イ. 飼い主には、ペットの生活を手助けする覚悟がある。
ウ. 時間をかければペットは飼い主に慣れてくれる。
エ. ペットを飼うときは、できる範囲で努力をすべきだ。
オ. 犬やねこは比較的飼いやすいので、かんでしまうことはほとんどない。

- (6) 本文中で述べられている筆者の主張の中で、あなたが最も共感できる考えは何ですか。次の条件に従って書きなさい。

条件① 原稿用紙の使い方にしたがって二百字以上二百四十字以内で書くこと。

条件② 題・氏名は書かないで本文から書き始めること。

条件③ 二段落構成で書き、一段落目に最も共感できる考えを書き、二段落目にそう考えた理由を書くこと。

